



秋の訪れを告げる

ヒガンバナが見ごろを迎えています！

と き 9月下旬まで 午前9時～午後5時（火曜休園）
※9月23日（火・祝）は開園し、翌24日（水）は休園

ところ 区立牧野記念庭園（東大泉6-34-4） / 入場無料

世界的な植物学者で、「日本の植物学の父」と呼ばれた牧野富太郎博士の住居跡を整備した区立牧野記念庭園で、秋の訪れを告げる「ヒガンバナ」が開花し、訪れる人々を楽しませている。

ヒガンバナはヒガンバナ科の多年草で、園内に群生して咲く様子が秋の庭園の見どころとなっている。

同園では赤花のヒガンバナのほかに、めずらしい白花のヒガンバナ（シロバナマンジュシャゲ）も見られる。赤花が咲き始めてから数日後に白花が開花し、現在は、赤花と白花の共演が楽しめる。

園芸相談員は「赤花が約600本、白花は約100本の芽が出てきています。これから見ごろを迎えますのでぜひお越しください」と話している。見ごろは今後1週間程度。

また、園内にある牧野記念庭園記念館では、「シダときのこ - 牧野富太郎と川村清一 - 」と題された企画展を開催しており、庭園の風景とともに、秋の訪れを感じることができる。本展で展示しているきのこの図は『原色日本菌類図鑑』（1954-55年）の原図で、今回が初公開となる。



白花のヒガンバナ
(9月14日撮影)



赤花のヒガンバナ
(9月14日撮影)

【秋の訪れを告げる花 ヒガンバナについて】

ヒガンバナは田んぼのあぜなど人里で多くみられるヒガンバナ科の多年草。庭園では毎年9月中旬から下旬にかけて真っ赤な花を群生して咲かせる。天上に咲く花という意味の「マンジュシャゲ（曼珠沙華）」や、墓地の周囲に生えることなどから「ユウレイバナ」とも呼ばれている。

シロバナマンジュシャゲはヒガンバナ科の多年草で、九州などに自生するヒガンバナとショウキラン（ショウキズイセン）との交雑種と推定される。

【植物学の聖地で企画展「シダときのこ - 牧野富太郎と川村清一 - 」を開催中】

本展では牧野博士が描いたシダの図と、『牧野日本植物図鑑』で菌類各種を担当した菌類分類学者・川村清一が描いたきのこの図を展示している。きのこの図は、『原色日本菌類図鑑』（1954-55年）の原図で、今回が初公開となる。

会期：9月13日（土）～11月3日（月・祝）午前9時30分～午後4時30分
（火曜休館・入場無料）※9月23日（火・祝）は開館し、翌24日（水）は休館

【問い合わせ】 花とみどりの相談所 電話 03-3976-9402



川村清一筆 クロカワ
(国立科学博物館蔵)